

第2章

危機的状況のパキスタン： 宗教、民族、軍

第1節 イスラーム原理主義とテロリズム

「イスラーム原理主義」(Islamic fundamentalism)という言葉が一般に使われている。この語が適切であるか否かについては本書では論じないが、「イスラーム原理主義」は「テロリズム」の同義語ではないということだけは先ず本章で述べておきたい。

「イスラーム原理主義」とはイスラームの原理を遵守することである。ただ、それを阻害する者が現れれば、ムスリム(Muslim = イスラーム教徒)はその阻害者を殺害してでもその人物(達)を排除しようとすることがある。その時に「イスラーム原理主義」は「聖戦」を呼び、場合によってはテロリズムを呼ぶこともある。

1978年4月、先述の「4月革命」という社会主義政変がアフガニスタンで発生した。それはアフガニスタンの一般国民には「宗教を否定する共産革命」と映った。それがテロリズムをもいとわない反共産主義運動へと発展し、更に内戦(聖戦)へと発展していった。

1979年にはソ連軍がアフガニスタンに侵攻した。これにより、ソ連・アフガニスタン政府連合軍と反共産勢力との戦争が始まった。反共産勢力の中には一人のアラブ人がいた。アメリカが国際的テロリストとしてその身柄拘束なり殺害なりを企図してきた人物オサーマ・ビン・ラーディン(Osama bin Ladin)である。彼は一度アフガニスタンから出国したが、1996年にアフガニスタンに再入国し、ター

リバーン勢力に参加した。ターリバーンを支援していたアメリカが彼らに対して決定的に敵対的になったのは特にこの時からであった⁸。

オサーマ・ビン・ラーディンはサウジアラビアの大富豪の出身である。そのことからすると、「イスラーム原理主義は貧富格差を発生基盤にする」という通説に直ちに首肯することは出来ない。イスラーム原理主義の基礎としては貧富格差よりはむしろ宗教思想の相異の方が重要なのではないだろうか。

ただ、オサーマ・ビン・ラーディンが巨額の資金をターリバーンに提供し⁹、そのことが彼とターリバーンとの関係を深いものにしたということは否定できないであろう。そして、極めて強い反米感情を抱くオサーマがオマル師とターリバーン一般に対して、反米感情だけでなく、思想面で、また武器としてのテロリズムに関しても強い影響を与えたとしても不思議はない。

第2節 パキスタンのイスラーム原理主義

1947年に建国されたパキスタンでは、パキスタンがイスラーム神聖国家であるべきか、あるいはムスリムの国ではあっても政教分離のセキュラリズム (secularism = 世俗主義、政教分離) の国であるべきかの論争が建国直後から始まり、今もって続けられている。

この論争は、1978年にジャー・ウル・ハック (Zia ul Haq) 軍事政権がムスリムの国パキスタンの「イスラーム化」(Islamisation) なる政策を打ち出すと更に激しくなっていく。「イスラーム化」政策は時とともに進められ、イスラーム刑法、救貧税、無利子銀行制度などがその骨子を成していた。それらはパキスタンがいかにもイスラーム神聖国家になりつつあるかのような印象を多くの外国人に与えた。しかし現実には「イスラーム化」政策は、武力という暴力装置で国を統治する軍事政権が正当性を確立するための手段だったのである。そしてまた、ジャー將軍は民主化運動を抑制するためにイスラーム原理主義組織に軍政の支持基盤を構築したのである。

「イスラーム化」の過程においてジャー將軍は、パキスタンのイスラーム原理主義組織として最強の組織力を誇るイスラーム協会 (Jama'at-e-Islami:JI) を特に

重用した。JIは主としてサウジアラビアのスニー派（スンナ派とも呼ばれる）のイスラーム原理主義ワッハーブ派¹⁰の信者から成り、「イスラームの純化」に力を注いでいる。ジャー軍事政権時代、JIは急速に軍内に浸透していき、1980年代に軍人になった若者の多くはJIの活動家になっていった。このため、現在の若手将校・将官達の中には「イスラーム軍人」としての意識が強いと言われる。なお、JIは1941年にインドで創立された。その6年後のインドとパキスタンの分離独立の時に本拠地をパキスタンに移転した。JIの活動根拠地はラホール、カラチなどの都市部である。

本論では、パキスタンの重要なイスラーム原理主義組織としてイスラーム神学者協会（Jamiat ul Ulema-e-Islami: JUI）についても述べておくことが不可欠である。JUIのイスラーム理論はインドを発祥地とするデーオバンディー学派（スニー派）の理論であり、急進的だと言われる。

JUIはJIと違って後進地域を主たる活動根拠地としている。具体的にはJUIは北西辺境州、バローチスタン州、パンジャーブ州南部といった国内後進地域にモスクとマドラサ網を張り巡らしている。JUIはアフガニスタンと国境を接する北西辺境州およびバローチスタン州のパシュトゥーン民族の社会に深く浸透している。ターリバーンは主としてJUIのマドラサで宗教教育を受けた若者達である。

以下、ジャー将軍の対アフガニスタン政策とパキスタン国内のイスラーム原理主義との関係に触れておこう。イスラーム圏、特に中東～西アジアの国際関係の動向はパキスタンにも直ちに影響を及ぼす。この地域のここ四半世紀の事件のうち、パキスタンのイスラームに対して最も大きな影響を及ぼしたのはアフガニスタン戦争であった。

1979年12月にソ連軍がアフガニスタンに侵攻すると、ジャー軍人大統領はアメリカと事実上の軍事同盟を結んだ。ジャー将軍はキリスト教国アメリカから巨額の軍事・経済援助を受ける一方で、「イスラームを共産主義から守るため」パキスタン国民の宗教感情に訴えた。先述のJIなどが軍事政権と行動を共にし、全国で（原理主義者達だけでなく）ムスリム一般の宗教感情が盛り上がった。

「イスラームを守り、国を守る」ジャー軍人大統領の得意絶頂の時期であった。何しろキリスト教の超大国アメリカさえもがジャー将軍とイスラーム原理主義者達に頼り、また、パキスタンに避難してきたアフガニスタン人達のためにパキスタンの原理主義者達が「イスラームの兄弟」として、自らの命を惜しまず協力していた

のである。

第3節 分断された民族とパキスタンの「ターリバーン化」

アフガニスタンの主要民族であるパシュトゥーンはアフガニスタン総人口の約38%¹¹を占める。パシュトゥーン民族はアフガニスタンとパキスタンの両国に居住する。彼らを両国に分断するデュアランド線（Durand Line）は1893年にアフガニスタンと英領インドとの間に引かれた国境線である。1947年に英領インド帝国がインドとパキスタンの2カ国に分割されて独立すると、デュアランド線の東側の地域はパキスタン領になり、同地域の住民は「パキスタン人」となった。

しかし、パキスタン人パシュトゥーンは一般に「自分はパキスタン人だ」との強い意識を持っているわけではない。アフガニスタン、パキスタン両国のパシュトゥーン民族は60前後の部族に分かれている。彼らの内、特にパシュトゥーン・ベルト居住者は国境の両側で血縁・通婚関係にあるだけでなく、商取引などで相互依存関係にある。即ち、彼らの多くにとって「国境」とは地図の上だけでのことである。

ターリバーンのほとんどはパシュトゥーン民族出身者である。そのため、アフガニスタンのターリバーンの影響が、パキスタンの北西辺境州、バローチスタン両州沿いのパシュトゥーン・ベルトに及ぶことは避けられない。また、パシュトゥーン民族の者はパシュトゥーン・ベルトだけでなく、パキスタンのパンジャブ州、シンド州の都市部に居住する者も少なくない。特に推定人口が1,000万を超えるシンド州カラチ市の社会的底辺層にはパシュトゥーン民族の者が多く、彼らの社会層は急進的イスラーム原理主義の素地になりがちである。

なお、パキスタン総人口1億4500万の53%以上を占め、パキスタンを種々の面で主導してきたパンジャービー民族の青年達にも「ターリバーン化」している者が少なくないという¹²。

「ターリバーン化」がパキスタンにとって難題を生み出すことは否定できない。特にパキスタンの国軍内で進んできた「イスラーム化」が「ターリバーン化」へと変質ないし進展した場合、パキスタン国家の存立にとって極めて危険な状況さえ発

生する可能性が高いのである。

第4節 パキスタン軍、アフガニスタン、イスラーム原理主義

Z・A・ブットー¹³政権に対する1977年クーデターで登場したジヤー政権が先述の「イスラーム化」政策の準備段階に入ったのは、ブットー政権に対するイスラーム諸政党の激しい反対運動に応えてのことであった。それはアフガニスタンで1978年「4月革命」が発生する前からのことであったが、同革命の後、特にソ連軍の1979年アフガニスタン侵攻後はジヤー將軍の「イスラーム化」政策は強化された。それが、軍内にも波及していったことは先述した通りである。

パキスタン軍の諜報機関として「軍統合情報局」(Inter-Services Intelligence: ISI)という機関がある。ソ連軍のアフガニスタン駐留時にアメリカの膨大な対パキスタン軍事・経済援助(後述)によりISIは軍内外で強力な実権を掌握するようになった。

パキスタンの国防にとって最も基本的な問題は対インド関係である。南北に細長いパキスタンの地形には「戦略的縦深性」(strategic depth)に欠けるという国防上の難点がある。ISIはそのためアフガニスタンをパキスタンの勢力圏に取り込もうと試みるようになった。それが、紆余曲折の後にターリバーンに対する全面的支援になっていったのである。

かくしてターリバーン軍団はISI経由のアメリカの資金援助とパキスタン軍による軍事訓練によって急速に強大化していった。ターリバーン軍団は1994年の出現時には2000人ほどの兵士から成っていたというが、その後2年足らずの1996年末には2万人前後とされていた。同軍団は2000年には5万人の大軍団になっていたと言われる¹⁴。

去る9月の同時多発テロ事件以後の国際情勢を観察するにあたって重要であるのは、ターリバーン軍団の規模よりもその兵士達の出身地域が広範であるという事実である。

1982年、パキスタンのジヤー軍人大統領は「イスラーム民主主義」の名のもとに軍の国政介入権を確立する「新政治体制」構築を検討し始めた。すでにそれより

先にISIがイスラーム諸国から志願兵を募って「イスラーム兵士」として育成する軍事訓練を開始していた。それらの若い兵士達の多くはアフガニスタンに送り込まれ、「アラブ・アフガン」(Arab Afghans)と俗称されることになったが、現実には彼らはアラブ人だけではなく、中央アジア諸国やフィリピンを含む43カ国のムスリムであったという。パキスタンで思想、軍事両面の訓練を受けた外国人は1992年までに10万人¹⁵に上ったという。

(深町宏樹)

(注)

- ⁷ ウサーマ・ビン・ラーデン (Usama bin Laden) と呼ばれることもある。
- ⁸ アメリカ政府は、ターリバーンの女性人権無視で米国内女性達の怒りが高まっていく中で、オサーマのアフガニスタン再入国以前からターリバーン政権から距離を置き始めていた。
- ⁹ ビン・ラーディンの資産は推定3億ドルといわれる。アハメド・ラシッド、「ビンラディンとタリバン「終わりなき戦い」」、『現代』2001年11月号、33ページ。
- ¹⁰ Wahab派 = Wahabiとも呼ばれる。18世紀にアラビア半島に発生したイスラーム原理主義で「イスラームの純化」を目指す。
- ¹¹ “AFGHANISTAN'S FACT SHEET”, *Frontline*, Oct. 26, 2001, p.131. なお、アフガニスタンのパシュトゥーン民族比率(資料5参照)が大幅に縮小したのは、国外への多数の難民流出、内戦による死亡者増などの数が人口の自然増を上回ったからである。
- ¹² アハメド・ラシッド(ママ)、『タリバン』、坂井定雄、伊藤力司 訳、講談社 の該当箇所(複数)を参照されたい。(原書: TALIBAN: Islam, Oil and the New Great Game in Central Asia, Ahmed Rashid, I. B. Tauris Publishers, London, 2000.)
- ¹³ ズルフィカール・アリー・ブットー = Zulfikar Ali Bhutto. 1973年に首相に就任し、国家社会主義路線を採り、軍の文民統制を試み、政教分離路線を採り、関係諸方面から非難され、1977年クーデターで登場したジャー軍事政権の手で1979年に処刑された。
- ¹⁴ 諸紙誌報道による。
- ¹⁵ アハメド・ラシッド前掲論文(「ビンラディンとタリバン「終わりなき戦い」」、『現代』2001年11月号) p. 32。